

# インターネットは世界をどう変えていくか

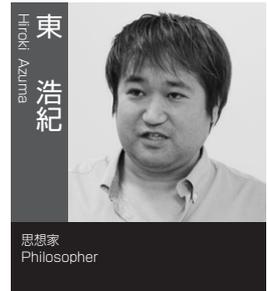
How Will the Internet Change the World?

三菱UFJリサーチ&コンサルティングでは、2010年度より、弊社の研究員およびコンサルタントの基礎的教養を高め、クライアントに対してより魅力的で洞察力のある知恵の提供ができるようになることを目的に、「学び」の場として『巖流塾』を開催しています。

この目的を達成するため、『巖流塾』では表面的な知識やスキルを習得する場所としてではなく、物事の実体、本質に迫ることができるようなテーマを用意し、自己鍛錬、塾生同士の相互研鑽の場を提供することを目指しています。

2013年度においては、『巖流塾』の活動テーマを『100年後の日本～縮小国家・日本に将来はあるか～』と設定し、急速な高齢化の進展、人口減少社会の到来が確実視されるなかで、100年後の日本の姿を想定し、どのようなパラダイムの転換が必要か、日本がとるべき戦略・政策とは何か、等について構想していくことを目指しています。

そして、外部から有識者を講師としてお招きして、有識者の方々とのディスカッションを軸に、あるべき日本の姿についての検討を進めることとしています。お招きする有識者の第2弾として、東浩紀氏に、「インターネットは世界をどう変えていくか」と題した講義をお願いいたしましたので、ここに講義録を採録いたします。



Since 2010, Mitsubishi UFJ Research and Consulting has offered the company's researchers and consultants learning opportunities through the Ganryu Seminar to enhance their basic knowledge and enable them to provide interesting and insightful ideas to clients. To achieve this goal, the Ganryu Seminar is intended to be not merely a place for acquiring superficial knowledge or skills, but also a place where the participants can learn from each another as well as train themselves by engaging in themes that are connected to the reality and essence of issues.

In 2013, the theme for the Ganryu Seminar is "Japan in 100 Years: Does Our Shrinking Nation Have a Future?" With the country gripped by rapid population aging and population decline, the goal of the seminar is to imagine the situations that Japan will face 100 years from now and to discuss ideas regarding, for example, what kinds of paradigm shifts will be necessary and what strategies and policies should be pursued over this period. Experts from outside the company have been invited to lecture, and the seminar participants can further their ideas about an ideal Japan through discussions with them.

Included in this issue of the journal is content from a lecture entitled "A Summary of How Will the Internet Change the World?" given by Hiroki Azuma, Philosopher, the second invited lecturer at the Seminar.

## Part1：講義

### 「福島第一原発観光地化計画」とは

今日はお呼びいただいてありがとうございます。東です。

本日の講義について最初に打ち合わせをさせていただいたときに、この塾でも原発問題を何回か取り上げられたということでしたので、最近私が参加したチェルノブイリの取材も非常に生きのいい話題ですし、その報告を最初にさせていただいて、その後「一般意志2.0」の話させていただきたいと思います。この2つはまったく関係がないかといえば微妙に関係があるので、それもうまくお話しできたらと思います。

なんで今回チェルノブイリに行くことになったのかといいますと、実は昨年からここ1年ほど「福島第一原発観光地化計画」という名前のプロジェクトをやっております。ちょうど最近の「東京新聞」にこの記事が出たので、もしかしたら読まれた方もいるかもしれませんが、この計画はどのようなものかといいますと、簡単にいうと、福島第一原発の事故の記憶を未来につなげるためにいったいどういふ考え方があるかということを考えています。普通だと、そこでモニュメントをつくりましょうとか、博物館をつくりましょうということになると思いますが、僕は、それだけでは結局人は福島には行かないだろうと考えました。広島等の例をみても、たとえば原爆ドームは、大変な困難を経験しましたが、今では世界遺産という形で観光地にもなっています。実はその原爆ドームも終戦直後は「解体するべきだ」という議論がかなりあって、しかし、いろいろ紆余曲折があって残ることになり、今は皆さんもご存じの通り、厳島神社と並んで広島県の重要な観光資源になっていて、修学旅行生も大勢やってくるわけです。そういう形で悲劇や困難な地を観光地化する試みというものは実は世界には事例があって、これは観光学の先端では「ダークツーリズム」という言葉で呼んでいます。

日本では「観光」という言葉は非常に軽薄かつ物見遊山という印象があって、僕のプロジェクトも「観光地化」という言葉を使っているために大きな反発を受けているのですが、実はこの「ダークツーリズム」は日本が先進国なのですね。どういうことかといいますと、今の広島の例もそうですし、水俣に代表される公害関係の施設もかなりあるのです。あと、火山、地震関連の施設も多いのです。ですから、戦争、災害、公害といった負の歴史が結構日本にはあって、そういうところに博物館が建って、修学旅行生が行くということがかなり一般化している国なのですね。このように、実は日本はダークツーリズムの蓄積が多い国だということもあって、その経験を生かしながら、福島今回の原発事故についても、たとえば事故跡地をツアーするとか、博物館を建てるかということをもっと積極的に検討してもいいのではないかと考えています。そういうようなことを僕と同世代の建築家や社会学者、ジャーナリスト等と一緒に組んで、架空のプランをつくるというプロジェクトをここ1年間ぐらいやっているのです。その一環としてチェルノブイリに取材に行くということになったわけですね。

### チェルノブイリは今どうなっているのか

この「福島第一原発観光地化計画」を検討するにあたって、「そういえばチェルノブイリはどうなっているのだろうか？」と調べたところ、これが結構意外な情報がネットから出てきたのです。2011年はたまたまチェルノブイリの事故から25周年だったのですが、この2011年に実は一般観光客向けのツアーが解禁されているのです。18歳以上で、基本的に健康であれば誰でも原発事故の跡地まで行けるということになっています。

チェルノブイリというと、たとえば死の灰が降って、全部無人の状態または今でも放射能の中で人々が苦しんでいる、というイメージがわれわれはあるのではないかと思います。また、原発の跡地まで入れるといっても、物々しい防護服を着ていくという感じなのかと思うのですが、ネットで調べてみると、どうも様子が違うでは



ないかというところが実はありました。調べると分かりますが、2012年にたまたまポーランドとウクライナ共催のユーロ2012というサッカー大会がありまして、ウクライナにかなりの国際観光客が来たのですね。そのサッカーのファンたちがチェルノブイリ4号炉の前で、Tシャツと短パンとかの姿で記念撮影をしている写真がネットには多数あがっています。こうしたことから、「チェルノブイリの実態はどうなっているのだ」ということで、現地に取材に行ってきたわけです。

日本では、もともとチェルノブイリ原発事故に対する関心が非常に高く、チェルノブイリについての書籍は大量に出ています。特に福島原発事故以降はかなり出ているのですが、調べてみると、チェルノブイリの観光ツアーに関する情報はほとんどないのですね。それ自体が実は非常におもしろいことで、原発事故というものをわれわれがどうとらえているのか、チェルノブイリについてどういうふうに語りたのかという報道の一種のバイアスみたいなものも逆に浮かび上がってくるのですが。今回、僕たちは取材に行って非常におもしろい情報を得ました。つまり、これらの情報は日本というか、世界でもほとんど紹介されていないものなのですね。

さて、チェルノブイリと福島を地図で比較してみると分かりますが、チェルノブイリの方が結構大きいのです。実はこうした比較図をつくるのも実は結構難しいのです。両方でベクレルの閾値が違うので、その閾値の違いを調整し、目盛を合わせるのが結構大変だったのです。チェ

ルノブイリ市中心部と原発は20キロぐらい離れていますが。日本で言えば、南相馬と福島第一原発ぐらい離れています。キエフ市はチェルノブイリから100キロぐらい離れたところにあります。日本の感覚だとだいたい仙台と原発ぐらい離れています。そのキエフ市からにツアーは出発するのです。

ところで、チェルノブイリ原子力発電所は、「V-I-レーニン記念チェルノブイリ原子力発電所」というのが本当の名前なのです。「レーニン記念原子力発電所」は実は旧ソ連に2つしかなくて、レニングラードとチェルノブイリにしかないのですね。だから、チェルノブイリ原発は、実はソ連という国家にとって非常に重要な原子力発電所だったのです。

そして、現地に行って分かったのですが、ここは原子力発電所としてはもう発電はしていないのですが、今でも事業所としては動いているのです。何でなのかというと、チェルノブイリはウクライナとロシアとベラルーシの3国の境界領域になっていて、ここが電力網のハブみたいな機能を担っているようなのですね。現地の方にインタビューしたところ、こここの事業所を廃止してしまうと、3カ国間での送電機能がとまってしまうらしいのです。ですから、チェルノブイリ原子力発電所は、発電の機能は失われたのですけれど、今でも送変電機能は残っていて、今でも原子力発電所の中は従業員がだいたい2,800人ぐらい働いています。

今、チェルノブイリでは新しい石棺をつくっています。全部完成すると、レールで移動して、石棺ごと全部を覆って、中で原子炉を廃炉にすることです。また、実は原子力発電所の中には、結構なところまで入れるのです。実際に事故を起こした4号炉の制御室とまったく同じ構造を持っている2号炉の制御室も入ることができます。

## 「ゾーン」の放射線量

僕たちは、チェルノブイリを取材で移動する間、「セーフキャスト」を使ってずっと放射線量をはかっていまし

た。この「セーフキャスト」とは、3.11の東日本大震災の直後にアメリカで始まったオープン放射能測定プロジェクトで、GPS機能付きの放射線測定器を使って、世界中の人たちが放射能を自分たちで測定し、結果をWebで共有するというプロジェクトです。僕たちは取材ワゴンの外側にセーフキャスト公認の測定器をつけて、GPSで位置情報はかりながら5秒おきにすべてのデータをプロットするというのを試みました。

事故地から30キロ圏内は基本的には居住禁止になっている地域で、「ゾーン」と呼ばれています。実際に訪問すると、この「ゾーン」の放射線量はあまり高くはありませんでした。基本的には東京と変わりません。ところで、チェルノブイリ原発は4号炉まで完成されていて、事故当時に建築中でその後に廃棄された5号炉、6号炉もあったのです。その廃棄された5号炉、6号炉の近くまで来ても、0.4から0.5マイクロシーベルト毎時の放射線量です。この0.4とか0.5という水準はどのくらいの放射線量かという、おそらく郡山とか福島市とかの方が高いと思います。そして、記念写真がよく撮られる原発の前で、2.32マイクロシーベルト毎時でした。高いと言えば高いですが、記念写真を10分間ぐらい撮ったところで、人体にほとんど影響がないようなレベルです。

チェルノブイリに関するゾーンの取材というと、プリピャチという町の写真がよく使われます。プリピャチは廃墟となった町として有名なところなのです。この町に観覧車があるのですが、これは有名な観覧車で、1986年5月1日にオープン予定の遊園地だったのです。しかし、直前の4月26日に事故が起きたために、遊園地ごと廃棄されたため、1回も動かなかったという有名な観覧車なのです。この観覧車は、チェルノブイリの悲劇をあらわす映像として有名です。ちなみに観覧車の背景に木がたくさん生えて林っぽく見えるのですが、これは事故後27年間の間に生えた林で、もともとはなかったのです。今、チェルノブイリに行くと、団地が林の中に埋まって見えるので、森の中の町みたいなイメージとなるのですけれど、もともとはまったく違った光景であっ

たわけです。27年という年月がたって、こうなっているのです。そして、実はここも東京とあまり変わらないような放射線量です。

チェルノブイリの写真の多くは、だいたいが白黒とかセピア色で撮られていて、廃墟、死の街、放射能で一瞬たりともいられない、みたいな感じなのですが、行くと分かることですが、実際の放射線量はだいぶ違うイメージなのです。これはちょっとびっくりします。

もっとも、とってプリピャチの町が安全なのか危険なのかとか、プリピャチの町に住民が帰るべきなのかどうかという点は分かりません。たとえば、ある部分は完璧に除染されている一方で、すぐ近くの林にホットスポットがあるかもしれない、ということをごガイドの方がおっしゃっていました。

さて、僕が今回、チェルノブイリに行って思ったこととしてはいろいろあります。まず第1に、さっきも言ったように、チェルノブイリ原発事故というイメージについてです。チェルノブイリの原発事故は、ものごとく悲惨な原発事故です。実際に後遺症で苦しんでいる人たちもいますし、廃炉もまったく進んでいないし、汚染地域も広大ですし、どうしたらいいのかわからないという現実があります。でもその一方で、今ご紹介したような現実もあるわけですね。

たとえば福島の問題において、福島は安全か危険か、福島原発はそのまま廃棄するべきなのか、それとも復興するべきなのか、という二項対立で考えてしまうことがあります。ところが、チェルノブイリに行ってみると、事態はもっと複雑で、たとえばウクライナのゾーンはもう安全なのか、住民はみんな元に戻れという話になっているのかというと、そうではないのです。実はウクライナの方々は、「ここは汚染されているので危険だから人は住むべきではない。われわれ大きな失敗をしたのだ」と、すごく割り切って考えているのです。ただし、割り切っているのだけれども、実はその割り切りのうえで、たとえば観光客が来たいというのであれば、観光ツアーを組織してみようか、という動きをしているわけです。

また、チェルノブイリ発電所を送電のハブとして動かさざるを得ないから、放射線を管理しつつ働こうかという動きとなるのです。チェルノブイリの町は、労働者もたくさんいるので、今でも生き続けているのです。

今ここで、一言で言うことはできませんが、福島の実態もおそらくこういう形になると思っています。すなわち、一方においては片がついていない問題が大量にありながら、他方で、しかしそれでも生きていかなければいけない人々がいて、放射線はある程度下がっていく、ということがモザイク状に展開していくのだと思うのです。そういう複雑な現実を想定するうえで、今回は非常に参考になる調査でした。いろいろな形で政策的な含意もあると思いますので、実際に出版されたらぜひ皆さんにも読んでいただきたいと思います<sup>1</sup>。

## 電子書籍の課題

こういう本を僕はつくっていて、こういう本をつくるために会社を起こしたようなものなのですが、実はこういう本は電子書籍にすごくしにくいのです。なんでなのかというと、今の電子書籍には2つ課題があります。ひとつは、権利関係の問題です。たとえば写真についてですが、デジタルデータそのものを電子書籍として配布するということに対しては実は写真家の方はすごいセンシティブなのです。単純にいうと、デジタルは複製可能だからです。たとえばそういうDRMの問題があります。

もうひとつの課題は、レイアウト処理の問題です。今の電子書籍というものは、簡単にいうと文字データをいかに簡単に読むかということに特化しているデバイスなのです。たとえば新書とか普通のビジネス書みたいなものは、文字がいっぱい並んでいても、電子書籍端末で読むということはできるのですが、一方でビジュアルが含まれる書籍については、実はレイアウト処理が非常に難しいし、またやったとしてもあまり魅力的にならないのです。電子書籍というのそういう意味で今のところ非常に貧しいメディアなのです。

今の電子書籍の世界では、どうやってお金を稼ぐかと

いうと、基本的にはアテンションエコノミーです。つまり、コンテンツをつくり込むよりも、とにかく話題性をツイッター上でいっばいつくって、「誰々さんが読んでいたのだったら私も読もう」という感じに仕向けて、単価が100円でも50円でもいいので、とにかくクリックしてもらうことが大切だ、という世界になっているわけです。だから、こういうふうな形で取材をして、コンテンツをつくり込むということは今の電子書籍プラットフォームでは実は非常にやりにくいのです。僕自身はインターネットで活躍している人というイメージがおそらく皆さんの中にあるのではないかと思います。こういう調査をするたびに思うことは、今のインターネットはあるタイプのコンテンツをつくるにはやりにくい世界だ、ということです。

## 「インターネット=つながる」なのか

今回のプロジェクトで個人的におもしろいと感じたのは、CAMP FIREというクラウドファンディングのプラットフォームでした。実はこのCAMP FIREを通じて、今回の取材経費の610万円ほどを集めました。ちなみに、これはCAMP FIREの中では今のところ一番支援総額が多いプロジェクトなのです。

一方で、ツイッターでチェルノブイリ取材の話をして、実は反応があまりないのです。つまり、RTされないのです。ツイッターではすごく反応が鈍いのに、クラウドファンディングではすごく反応が良く、610万円も集まっているのです。このことがいったい何を意味するのか、僕たちも、まだ事態の分析が完全にはできていませんが、たとえば「ソーシャルとは何なのか」ということに関して、いくつかのことを示唆しています。簡単にヒントだけいうと、要はツイッター上での話題というものは無害な、「これ、いいよね」とか「これ、おもしろいよね」というように、自分は傷つかないものがRTされる傾向が非常に強いのです。ですので、簡単にいうと、今回のような問題提起的なプロジェクトに対しては非常に警戒心が働くということです。

それに対して、クラウドファンディングは、他人に知られないまま、自分があるプロジェクトを支援するという行為をすることができます。つまり、簡単にいうとこっそり献金することができるわけですね。

インターネットというと、「つながる」ということをみんなすごく意識すると思います。「インターネット=つながる」と今は考えられています。実は1990年代のインターネットの黎明期においては、必ずしも「インターネット=つながる」メディアではなかったのですが、2000年代になって、グーグルやフェイスブックの覇権の時代がやってきて、ウェブ1.0から2.0にいったときに、とにかくインターネット=ソーシャルメディアだということになったのです。

先ほど言ったように、もともとはインターネットというメディアは、従来の書籍では不可能なさまざまなインターネットラティブなコンテンツを分厚く提供するためのメディアとしておそらくは考えられていたわけですね。電子書籍の夢を追っている人たちの中にはまだそういうことを考えている人たちが結構います。けれども、今の新しいトレンドは、いかに軽いつながりの媒介になるようなコンテンツを出すかということの方が実は電子書籍の方向性としては優勢になっているのです。僕としては、つながり指向で仕事をしていくと、どんどんコンテンツが貧しくなっていくので、いかにその世界の中でコンテンツに資本を集約するような形をつくっていくかということを考えているのですが。

## 「一般意志」とは何か

というわけで、ある話題を通して人とどんどんつながっていくというツイッターの話と、ある問題に対して孤独に支援・投票するクラウドファンディングの話に対比したわけですが、この孤独に投票することについて書いたのが、実は「一般意志2.0」という本です。

集合知を政治に活かすという試みが、今非常に話題になっています。しかし、僕は集合知を政治に活かすということに関しては、技術的な障害と思想的な障害がある

と知っているわけです。技術的な障害とは非常にシンプルで、ビッグデータをどう集めるか、どういう解析するかということです。たとえば、今回のネット選挙の解禁について考えてみましょう。ちなみに、今回のネット選挙の解禁というものはそんなに重要な解禁ではなくて、単に今までの選挙のシステムに依存したまま、立候補者が有権者に対して一方的にネットを使って告知ということが解禁されたにすぎないので、ほとんどネット選挙解禁ではないと僕は思いますが、しかし、一歩進んだことで、結構最近話題になっているわけです。そして、もしもネット選挙における技術的障害があれば、それらはいずれにせよクリアされていくわけですね。

ところが、それとは別に、思想的障害というものがあるというのが僕の考えです。それはどういうことか、説明しましょう。まず、そもそも政治思想というものは、みんな伝統的に熟議主義なのです。「一般意志2.0」の中では、たとえばハンナ・アーレントとかユルゲン・ハーバーマスについて言及しています。また、「熟議民主主義」についても言及していますが、この「熟議」という言葉は民主党政権のときに急に政治的なバズワードにもなったのです。その仕掛け人というか、それを導入したのは鈴木寛参議院議員（当時）で、彼は「つぶやきから熟議へ」というキーワードを掲げたりしていたのですね。鈴木寛さんは元経産官僚で、その後、慶応義塾大学SFCの教員を経て参議院議員になられた方で、民主党の中で最もネット戦略に詳しく、僕も親しくつき合わせていただいているのですが、彼は、ツイッターのようなつぶやきというのは未成熟な民意で、それは熟議によってちゃんと高めていかなければならない、という考えなのです。基本的には普通そう考えると思うのですね。つまり、ネット上に大量に流通しているつぶやきというのは政治的な民意に比べて未熟なものであり、それを熟議によって成熟した民意に高めていくということが民主主義の質を上げるのであると多くの人は思っているのではないのでしょうか。たしかに、私たちの目の前には大量の集合知がある。しかし、そういう発想である限りにおいて、こ

これは実は集合知を政治に活かすことはできないわけですね。非常に抽象的になりますが、実は「政治思想はどのようにリアクションするべきか」ということがこの本のメインのテーマなのです。

思想的障害については、普通は人文の世界では古典再読で乗り越えることに決まっているのですね。「昔の人はこう言っていた」というのが一番強いやり方です。人文の世界では、新しいコンセプトなどを発明してはいけません。それで、思想的障害を古典再読で乗り越えるために、僕はルソーを再読してみたわけです。

ルソーの「社会契約論」という本は1762年に出版された本で、現在からもう250年も前の本です。この「社会契約論」という本は、歴史的にはフランス革命が「社会契約論」から始まったと言われているぐらい、非常に大きなインパクトを持った本で、だいたい誰でも名前を知っている本なのですが、実は非常に変な本なのです。その“変さ”についてはいろいろとあるのですが、その“変さ”がどこに集約されるのかというと、「一般意志」という概念に集約されています。この「一般意志」という概念は、普通は「特殊意志」または「個人意志」と比較されます。この「一般意志」を英語でいうとGeneral willで、「個人意志」はParticular willです。ルソーの考えではもうひとつ別に「全体意志」という概念があります。これは英語だとGeneral of allで、直訳すると「みんなの意志」ですね。「全体意志」というとTotalという単語が使われていそうですが、そうではなくて、もともとは「みんなの意志」という意味なのです。

このように「一般意志」と「みんなの意志」と「特殊意志」という3つの概念があり、「一般意志」と「みんなの意志」とは違うというのが実はルソーの「社会契約論」の非常に重要なところなのです。しかもルソーはこの「一般意志」について、「一般意志というのはまず間違えることがない。一般意志が命令すると個人は絶対それに従わなければいけない」と、非常に強力なことを言っているので、これは何なのだ、ということに当然なるわけです。

## 一般意志＝集合知

ただし、ルソーを読むと結構おもしろいことを書いていて、一般意志はなぜ誤ることはないかという、非常に有名な部分です。ルソーがここで書いてあるのは、「全体意志と一般意志には差がある。どうして差があるかというと、それは一般意志というものは共通利益にかかわるのに対して、全体意志は個人の、プライベートな利害にしかかわりを持たないからだ」と書いているのです。そして、「だから結局のところ、全体意志というものは、個人の特殊意志の合計でしかないのだ」というふうにいうのです。では、「一般意志」はどうなのかというと、「一般意志というものは特殊意志が集まったときに、そのプラスとマイナスがぶつかり合って、相互相殺されることで出てくるのが一般意志であり、一般意志とはそういう意味で単なる特殊意志の合計ではないのだ」というようなことを書いているのです。

その箇所に続いてルソーが何を書いているかというと、ここは僕はすごくおもしろい文章だと思っているのですが、「もしも人々が十分に情報を与えられて、かつ市民たちがまったくお互いの間でコミュニケーションをとらないのであれば、多数の特殊意志が集まって、常に一般意志が結果するであろう。そして、熟議は常によいものになるであろう」というような文章なのです。

ちなみに、この段落に熟議という単語 *délibération* が出てくるのですが、その他、英語で言うとInformedとかCommunicationとか、21世紀の政治思想を考えると非常に重要なキーワードがこの段落に詰まっているので、僕はここの文章がすごく好きなのです。そして、「人々の間でコミュニケーションがないとしたら」という部分は、文字通りノーコミュニケーションなのです。この文章は、とにかく絶対に誤訳しようがない文章なのですが、すごく変な文章です。つまり、ルソーは、一般意志が出てくるのは双方にコミュニケーションがないときだとはっきり言ってしまっているのです。

これはルソーの思想の中では一貫して、ルソーは

実は政党政治とか間接民主制というものをまったく認めませんでした。市民同士が議論をして、集まって、何か合意をとっていくということをやるとするのは、ルソーの考えでは「よくないこと」なのです。では、ルソーの「一般意志」というものはどういふときに出てくるかというと、結論からいうと、みんながお互いに、まったくコミュニケーションをとっていない状態で、自分の意志だけをどこか抽象な空間に投げて、その抽象的な空間でそれぞれの「特殊意志」が集まって「一般意志」が生成するのだ、という発想なのですね。たとえばハーバーマス流にいう、討議的な理性を駆使したり、言語的コミュニケーションを行ったりするという発想は、ルソーには一切ないのです。

ところが、この「コミュニケーションをお互いにまったくとらない」ということに関して、今までのルソーの翻訳者たちはかなり戸惑ったらしくて、たとえば桑原武夫訳の岩波文庫などでは「徒党を組んだりしない限り」と翻訳されているはず。しかし、簡単にいうとそれは誤訳です。この文章は絶対にそういう翻訳にはならないはず。けれども、当時はそういうふうに理解しないと分からなかったのだと思います。この部分は結構謎めいた文章だと言われていて、この「一般意志」という概念について、カントは「統制的理念」という努力目標みたいな感じでとらえています。また、ヘーゲルだと、弁証法の果てに、「頑張ればいつか一般意志に到達できるかもしれない」みたいな話でしかないのです。過去の哲学者たちは、このように抽象な努力目標みたいなものとしてこの部分を解釈してきたわけ。僕には、それらがあまりにも抽象的で、非現実的なもののように見えたのです。

そこで僕は、これを文字通りの意味でとってみようと思いました。つまり、「相互にコミュニケーションをとらない」という状態で、それぞれが十分に情報を与えられて、勝手に意志表示をするために集まることで「一般意志」になる、ということです。実はこれはわれわれ21世紀に生きる人間からすると非常に分かりやすい世界では



ないかと僕は思ったわけです。この部分を現代のインターネットがある状態で素直に読めば、これは非常に分かりやすく「集合知」のことを言っていると理解できるのです。すなわち、一人ひとりが情報を十分に与えられた状態で、お互い討議することなしにインターネット上で投票をするということですね。「一般意志」とは「集合知」のことではないか、という考え方が、僕のこの本のスタートになっているのです。

## オタクの政治思想

ここから先が重要なのですが、ルソーのこの「一般意志」という概念がなんで哲学的に謎だといわれてきたかということ、この「一般意志」というものはどう見ても全体主義みたいな話なのです。つまり、「一般意志」という抽象的なものがあって、それは絶対に間違えることはなくて、それは個人の意志を超えている、といっているわけですから。

ところが、「社会契約論」以外のすべてのテキストにおいて、ルソーは徹底した個人主義者なのですね。また、ルソーは政治思想家であると同時に文学者でもありました。そして、文学者としてのルソーは、ロマン主義の起源、恋愛小説と告白小説の起源といわれているのです。ロマン主義というものは、今のネット用語でいうと「中二病」みたいなことで、「世間なんか関係ない。俺は俺で生きるんだ」みたいな話ですよ。

政治思想家としてのルソーを見ても、たとえば「学

問・芸術論』という本では、ルソーは「基本的には文明が人間を悪くしている。ばらばらの個人で、狩猟採集民みたいな小さい家族だけがいて、まったく他人に触れないときが人間が一番幸せだったのだ」という議論をしているのですね。「人間不平等起源論」もそうですね。「人間不平等起源論」はよくマルクス主義の起源みたいにもいわれますが、簡単にいうと、「人間は交換をするようになったから不平等が生じているのだ。自活が一番。社会なんかどうでもよい」ということを言っているのですね。

政治思想家としてのルソーも「学問・芸術論」や「人間不平等起源論」では明らかに孤独な個人主義者だし、文学者としてのルソーも明らかに個人主義を推しているのです。また、彼の伝記を読んでも、サロン文化との確執が非常に重要です。ルソーがいた時代のパリは、ダランベルとかディドロとかがいて、とにかく哲学史にも残るような非常にきらびやかな時期なわけですね。当然のことながらルソーもそのサロンの中にいたわけですが、けれども、ルソーはそのパリのサロン空間とは何回も確執を起こしていて、結果として田舎に引きこもるという選択をするのですね。

また、ルソーの「新エロイズ」という恋愛小説があります。あまり知られていないことですが、この「新エロイズ」は「人間不平等起源論」とほとんど同時期に出ているのですけれど、実はルソーの生計を支えていたのはこの恋愛小説で、18世紀フランスの最大のベストセラーでした。つまり、ルソーは学者ではなく、どちらかというと彼は物書きであり、ベストセラー作家だったのですね。「社会契約論」のイメージが非常に強くあるので、私たちは「社会契約論」を前提にルソーという人物を見てしまっていますが、ルソーの人生全体を見たときには、「社会契約論」の仕事は余技というか傍流であり、彼の生計を支えていたのは基本的には物書きとしての仕事だったのですね。そのほか、ルソーはミュージカルもいっぱい書いています。さらに、「むすんでひらいて」という童謡がありますが、あれはルソー作曲です。

つまり、ルソーは、今の言葉でいうと、どう見てもオ

タクのクリエイタータイプなのです。でも、これは非常に重要なことで、「社会契約論」はそういうタイプの引きこもりの人間が考えた政治思想だということです。「社会契約論」が公表されて以降の2世紀半、日本でも公表から100年後ぐらいの19世紀には受容されていますけれど、この引きこもりでオタクの政治思想という側面を、多くの哲学者たちは根本的に見ていなかったのだと僕は思います。

それは、ルソーの受容が、基本的には2つの系統に大きく分かれていたからだと思えます。つまり、「社会契約論」に代表される民主主義の理論的な基礎としてのルソーと、白樺派から純文学につながるロマン主義者としてのルソーです。つまり、政治思想家としてのルソーと文学者のルソーという2つのルソーが、実は世界的に見ても日本でもまったく交差しないうま受け取られて、今日にきているのですね。なんで2つのルソーが交差しなかったのかというと、さっきからお話ししている通り、一方は全体のことを考えて、他方は個人のことを考えているように見えるからなのです。でも、それはルソーというひとりの人間の中では統一されていたはずで、それは何で統一されているのかということの鍵が、「一般意志」という概念にあるというのが僕の考えなのです。つまり、「一般意志」という概念は、「引きこもったオタクたちが集まって社会をつくるとしたら、どうしたらいいと思うのか」という話なのです。今からのネットの時代を考えていくうえで、これは非常に重要なことであると僕は思います。

つまり、ルソーが考えているのは「人間とできるだけかわらない政治」なのです。お互いがコミュニケーションをほとんどとらないで、それでいかに政治をうまく回すのかということが、実はルソーの「一般意志」という概念なのです。別な言葉でいえば「熟議なしの政治」です。

## ルソー、フロイト、グーグル

ここにさらにつけ加えると、さっき僕はルソーがロマン主義者で、中二病的で、引きこもりのオタクで、人と

のつき合いが非常に苦手であるというようなことを言いましたよね。実はこの問題はすごく重要な問題で、今日はこの問題に深く踏み込むと長くなってしまいますので、さらっと言うのにとどめますが、人間というものをどうとらえるかということと関係しているのです。

ところで、この本は、副題に「ルソー、フロイト、グーグル」と書いてあるのです。何で「ルソー、フロイト、グーグル」と並んでいるのかというと、僕の考えを一言でいうと、ルソーとフロイトは両者とも、人間というものは意識ではなくて無意識に動かされている、と考えた思想家なのです。ルソーの前の時代に「社会契約論」として有名なホッブスやロックという思想家がいました。ホッブスもロックも、とても理知的な「社会契約論」を構築しており、要は「ひとりで生きていくと、自分の身体とか自分の所有権等が脅かされるから、合理的な選択として人間はみんな社会をつくったのだ」という考えなのです。ところがルソーは違うのです。ルソーは「合理的に考えたら社会は人間をつくるべきではない」と考えているのですが、「では、何でつくったんだ」というと、「いやー、何となくつくっちゃうんだよね、人間は」みたいな話なのです。

これは「社会契約論」の中では「憐みの情」という言葉で言われているのです。つまり、「人間は何となく近くに寄ってしまう」「人間はなんとなく情感を持ってしまう」「それで、人間はお互いに関わらない方がいいのに、なんとなく関わってしまう」ということなのです。これが実は人間の基本的な条件で、したがって、人間は社会をつくるのだというところからルソーの論は始まるのです。人間の合理的な選択、後の時代に登場する言葉を使えば経済的合理性ですが、ルソーの考えでは社会の根源とは、こうした合理性ではなくて、もっと根本的な、身体的情動みたいなものに依存しているというわけです。

このような人間観を持っていたので、だからこそルソーは19世紀に圧倒的影響を与えたロマン文学の基礎ともなり得たわけです。そして、このルソーの人間観をもう少し洗練された形で理論化するのが100年後のフロイト

なのです。フロイトが「無意識」という言葉で発見したのは、こういうことであつたわけです。つまり、人間というものは基本的には“理”で動いていないで、“情”で動いているということです。しかもその“情”というのも、他人に対する優しさということではなくて、もっと生々しい、たとえば性欲みたいなものだったりするわけです。このように、人間は“理”ではなくて“情”で動くということを開発したのがルソーとフロイトで、ルソーの「社会契約論」の基礎にはこういう思想があつたのだということが、僕がこの「一般意志2.0」という本で言いたかつたことなのです。

## グーグルは何を頭にしたのか

では、もうひとつの「グーグル」とはどうなのでしょう。グーグルと言えばインターネットですが、このインターネットが登場したときに、多くの人々が、「さあ、ここが新しい熟議の空間だ」「新しい民主主義的な議論があらわれて、新しい公共性が出てくるぞ」という議論をしたわけですね。けれども、2000年代になって明らかになりましたが、事実はそうではなかつたわけです。では、どういうことになつたのかというと、今のインターネットは、どちらかというと、集団的な無意識があらわれる場だということです。たとえば、最近話題のヘイトスピーチの問題があります。もしくは、このヘイトスピーチの問題ともつながっていますが、たとえば尖閣問題が起きたときに、日本でも中国でもナショナリズムがぶわっと勃興しました。あれは、人々が合理的な選択として相手国との衝突を選んでいくということではなく、人々の怒りとか動揺みたいなものがそのまま言語として現れて、そのままインターネットで提示されたということです。これからのインターネットは、こういう形で人々の無意識を可視化する場としてどんどん大きくなっていくと思います。

これは大事なことです。たとえば、最近のネット選挙云々という話が出るときには、「インターネットには民意があらわれている」という言説がともなっているわけで

す。それはある意味で正しいわけですね。けれども、「インターネットの民意」というものは、熟議を通した市民の成熟した政治的な意見などでは決してなく、どちらかというところ、それ以前の状態の「これは嫌だ」とか「これはいい」といった人々の感情とか情動そのものであるわけですね。では、この情動の部分を無視していいかといえれば、そういうことはまったくないわけですね。これはわれわれの日常生活でも同じことで、たとえばビジネスだからすべて合理的に話を進めることができるか、ということもそうでもないわけですね。もしも、「こいつ、気持ちが悪い」と感じたら、ビジネスでも話は進まなくなるわけですね。気持ち悪いと感じてしまったら、何と云って相性が合わないわけですから、もはやビジネスの関係を切ることも合理的な選択になるわけですね。つまり、相性が合わないとか合うとかということとは、非常に情動的であり、合理的な判断の外にあるから無視していいかとは思ってしまうがちなのですけれども、実は人間はその部分がかううまく処理されないと、その次のステップのコミュニケーションもできないわけですね。

先ほどお話しした通り、今のインターネットが何を可視化しているかということ、今まで私たちが見ることができなかった集団の無意識というものを見ることができるようになったわけですね。今までは、たとえば新聞があり、もしくは国会中継があり、政治家が何かしゃべっていて、マスコミや言論人も何かしゃべっているわけですが、これらはいわば日本という国の「意識」の部分です。よね。「私たちはこういう国です」とか「私たちはこういう社会をつくりたいと思います」といった、いわばきれいごとが並んでいるわけですね。だから、そうしたきれいごとが今までは見えていなかったのです。つまり、僕たちの社会は今までは自分たちの意識しか言語化されていない世界だったわけですね。

ところが、ここ15年間ほどのインターネットの急速な普及によって状況は劇的に変わってしまい、私たち自身の無意識、もっと下品な言い方をすれば私たちの下半身が何を欲望しているかということ、私たちが常に見え

る世界になってしまったのです。これは非常に重要なことですね。

## 文学と政治が不可分な社会に生きる

だから、今後の政治家のミッションは、この国民の下半身をいかにコントロールするかという問題にたぶんなるでしょう。これはすごく下品な例えなのでこの本には書かなかったのですが。

ところで、ルソーの「告白」という小説をお読みになった方がいるかもしれませんが、何でルソーの告白小説が世界に衝撃を与えたかということ、まず自分の性的話から始めているわけですね。子どもの頃に家政婦にお尻をたたかれたときに興奮したという話から始まって、若いころ耐えられず実は性器を露出していましたとか、そういう話ばかりなんですよ、ほんとに。1度皆さんもだまされたと思ってお読みになったら、「ルソーはどうしちゃったんだ」「君は何で60歳にもなってこんなことをやろうとし始めたんだ」と思いますよ。でも、この告白がすごい衝撃を世の中に与えたわけですね。

ルソーは、そういう意味でいうと、自分の合理的な意識を常に脅かしてくる性とか欲望というものに対して、すごく自覚的な人だったのだと思うのです。それが文学という形で結実したのが「告白」という小説なのです。

このように性とか欲望みたいなものをテーマにすることが、実は18世紀末にはすごく新しかったのです。だから、この後の19世紀にロマン派というものが出てくるわけですね。つまり、ロマン主義では、合理的・理性的に動く主体ではなく、欲望に振り回される人間を描くことを、文学としてのテーマにしたのです。これがロマン主義と言われる人たちのスタンダードになっていくのです。

このように、ルソーは欲望とか身体に対しておそらくすごく自覚的な人だったわけですね。おそらくあの時代の哲学者の中でも、ルソーだけがそのことを正確にとらえていたのだと思います。だから、彼が書いた「社会契約論」も、欲望に振り回される周りの人間とはうまく社交

できない人間のことを考えた議論になっているのですね。

今、僕たちの社会においてルソーを読み直す価値はおそらくここにあるのだと思います。つまり、経済的合理性に基づいて人々が行動するというタイプの社会観・経済観というものが理論的にも崩壊しているし、現実面でも反証されているような世界に僕たちは今、生きているわけです。そして、欲望に振り回される人間をどう処理していくか、ということを経済レベルで考えなければならぬ時代に来ているわけです。こうした現在だからこそ、ルソーの人間観をもう1回ちゃんと見直す必要があるだろうと思います。このことは、ルソーが文学者でありながら政治を考えていたことと非常に重要な関係があります。

一方で、現代は文学と政治が分かれている時代です。たとえば、政治的な正しい空間と、たとえば2ちゃんねる的なサブカルチャー的な空間が分離されている時代です。しかし、これから先の時代は政治と文学、意識の世界と無意識の世界をもう分離できないわけですね。両者はインターネットというテクノロジーを通じて常に相互介入してくるので、分けていることができなくなっているわけです。皆さんにお伝えしたかったことは、ルソーがこういう意味で欲望との関係において人間を規定していた、ということです。

## 欲望としての一般意志

ところで、この「一般意志2.0」の中でも書いているのですが、「一般意志」の「意志」という言葉はvolonteというフランス語なのです。このvolonteという言葉は、たとえば私はコーヒー飲みたい、という時等に使う言葉ですので、willよりはwantに近い意味なのです。「意志」という日本語に訳すると、すごく明確な意識を持った志向性ととらえられるわけですが、おそらく原文の意味はもっと緩いものです。だからそれは「一般欲望」と翻訳してもいいのかもしれませんが。つまり、みんなが一般的に欲望していることであり、それが可視化されてしまう世界のことですね。

さきほど「一般意志」の定義についてお話ししましたが、別の例でいいますと、たとえば生活保護問題というものが最近2ちゃんねるでありました。具体的には、「生活保護のやつはもらい過ぎだ」とか「あんなのやめた方がいい」とか「あいつらはみんな飢えて死んだ方がいいんじゃないか」みたいな、ヘイトスピーチに近いような言葉が2ちゃんねるでふつふつと書き込まれているわけです。これらの書き込んでいる人たちがお互いに議論しているかということ、お互いにまったく議論していないわけです。では、十分に情報を持っているかということ、ずうっとネットで検索しているから意外と情報を持っていたりするわけです。つまり、十分に情報を持って、お互いにコミュニケーションを持たず、自分の意見だけを持っているという結果が、2ちゃんねるのスレッドです。これは、ルソーの「一般意志」の定義をそのまま移植したようなものです。だから2ちゃんねるって、ものすごく「一般意志」に近いのです。僕はこのことにすごく重要なことが含まれていると思います。

つまり、相互にコミュニケーションをとってしまったら、お互いが意見を調整してしまうので、結局「一般意志」は出てこない、というのがルソーの考えなのです。ただし、こうした「一般意志」を、正しい民意であるとか、合理的な民意であると考えたら、ルソーが言っていることとは違うということになります。つまり、人が議論したり熟議したりすることによって、お互いの意見は違うステージに移行して、違う結論が出ることもあるし、逆にいうとお互い刺激し合うことで人間性が高まるという話になるからです。

でも、おそらくルソーは「一般意志」という言葉でもっと全然違うことを考えていたのじゃないかな。それは、「みんなが何を望んでいるのか、まずクリアにしようぜ」という話なのだと思います。そういう意味でいうと、そのためのテクノロジーとなるインターネットをわれわれは人類史上初めて手にしているのです。つまり、生活保護についてどう思うと言われたら、お互いが意見を調整するような場では、「いやいや、それは大事ですよ」と



か「社会は助け合わなければいけません」みたいなきれいなことをみんな言うわけですね。でも一方で、お互いの意見が調整されない2ちゃんねるのような場では、「生活保護費をパチンコで使っているなんて許せん」みたいなことが書き込まれるわけですね。

このときに、この2つのどちらが本当の民意なのでしょう。もしも、僕たちが社会的にコミュニケーションをして民意をつくり上げていくとすれば、そこには建前とかもいっぱい含まれているかもしれないけれども、とりあえず討議と熟議でつくり上げた合理的な結論を選ぶべきだと思います。つまり、先ほどの例で言えば、「生活保護はなくすべきではない」ということです。けれども、たとえば「生活保護なんて受けているやつが悪いでしょう」とか「そいつらは結局、社会に依存しているだけでしょう」とか「そんなやつらがいるから結局この国がだめになるんだよ」ということを多くの人間が思っていることもまた事実ですので、それが可視化されるということは実はとても重要なことなのですよ。

この「一般意志2.0」という本では、私たちの世界は、熟議と一般意志の2つをある種2本立てでいくべきである、ということが結論になっています。つまり、「一般意志」に振り回されてはいけないうえです。「一般意志」に振り回されたら、たとえば生活保護はやめなければいけないし、近隣国とも戦争しなければいけなくなりますので、これは大変なことになるわけですね。それはまずいのだけれど、やっぱりそういう情念みたいなものがふつ

ふつとこの国にあって、それは何かの形でコントロールしないといつ暴走するか分からないということ、施政者の側が常に意識し続けているという意味では僕はそれはよいことだと思うのです。

たとえば、最近で「ヘイトスピーチ問題」が話題になっており、新大久保等でデモをやっている若い人たちがいます。ヘイトスピーチが許されるべきかどうかといったら、僕は許さるべきではないと思います。しかし、ああいう言論を完全に封殺することができるかといったらできないのですよ。何でできないかという、たとえば私たちが、自分の性欲を無視できないとか、自分の中にある他人に対する憎悪だとか嫉妬だとかを無視できないことと同じです。そうした感情を完全になかったふりをして言論空間をつくったり、政治の空間をつくったりすることが、もはやできなくなってきたのです。

インターネットによって世界はどう変わるか、と議論する時の最大のインパクトはこの点だと僕は思っているのです。つまり、ネットというものはソーシャルに人をつないでいくというよりも、各人が人間的なコミュニケーションを抜きにして、自分の欲望をそのまま可視化することができるメディアであり、各人が孤独にぶつけた欲望みたいなものを集めて集積するのに向いているメディアなのです。

たとえば、フェイスブックは人とつながるためのメディアだといわれていますが、記名的のフェイスブックに対して、匿名でないと自分の正直な気持ちをさらすことができないのではないかと、多くの日本人は違和感を覚えているわけですね。

このテーマをちょっと踏み込んでみると、もしかしたら、日本とアメリカとヨーロッパの比較文化論みたいなことを重ねていかなければいけないのかもしれない。僕は日本で2ちゃんねるとかニコニコ動画みたいなものができたことは、おそらくすごく重要な意味があると考えています。それら日本で生まれたメディアは「つながるメディア」とはまったく別の、「孤独なメディア」なのです。孤独に欲望をぶつけるメディアなのです。

2ちゃんねるとかニコニコ動画でも人はつながっているのではないか、と思うかもしれないですけども、そのつながりとは、本当の意味でのソーシャルというか社会的なつながりとはまったく別のつながりであるわけです。たとえば初音ミクのコンサートに行くと、舞台上の初音ミクを見て、うわーっとみんなで騒ぐとき、お互いがどういう人間かとか、お互いどういう考え方を持っているかということはまったくコミュニケーションしないでいいわけですね。初音ミクというアイコンに向かってばつと熱狂があればいいのです。

## 一般意志は熱狂なのか

僕が今、コンサートの例を出したのはたまたまではないのです。実はルソーは、理想の民主主義論を執筆しているのですが、これがすごく変な文章なのです。この話を「一般意志2.0」の中に入れられなかったのは残念でした。この民主主義論は、ルソーとダランベールとの間の長い書簡の中で最後の方に出てくるので、おそらく僕のように全集を全部読んだ者しか気がついていないと思うのですが。

ここでルソーはすごく変なことを言っているのです。ダランベールとの書簡の内容について、すごく簡単にいうと、「パリは演劇があるので腐っている」とルソーは書いているのです。演劇というものは社交性の空間であり、ああいう社交文化が栄えているところでは必ず政治も腐る、そもそもパリみたいな大きな町では民主主義は実現できない、とルソーは書いているのです。では、どのようなものが理想の意思決定の状態だと思うかという話になると、まずジュネーブぐらいの町の規模がいいとルソーは書いています。ちなみに当時のジュネーブは、人口2~3万の小さな町です。それで、町の住人がみんな丘の上に集まって、そこででっかい木を立てて、その周りを回ったりしながら、政策等についての賛否みたいなもの

をとって、みんなで拍手するといった、そういう熱狂的空間が「一般意志」をつくるのだ、というようなすごく変なことをルソーは書いているのです。これは率直にいうと何だかよく分かりません。ただし、この「木を立てる」という行為は結構大事なことであったらしく、後年、フランス革命が成功したことを記念して、若いころのヘーゲルは木を立てたというエピソードがあるのですよ。僕が言いたいのはつまり、ルソーが考えていた「一般意志」というものは、おそらく熱狂とかに近いものなのです。でも、熱狂に近い「一般意志」というものはそのままと当然独裁政治につながるのです。この「熱狂こそが一般意志を生み出すのであり、間接民主制はだめだ」という話は、実はナチス政権を結構強力にサポートした法学者カール・シュミットが、「独裁」という本の中で一般意志について解釈している部分と呼応します。これは非常にすぐれた解釈なのですが、でも、結局そのすぐれた解釈は当然のことながらヒトラーの独裁を肯定するためにつくられていたのです。

このような、一般意志イコール熱狂、そして媒介なし、熟議なしの政治的意思決定、そしてそれが非常に可能性を持っているというルソーの議論は、20世紀前半でポピュリズムを生み出しているもので、現代ではそのままでは採用できないのです。でも、そこに何か人間集団の意思決定をめぐる、すごく本質的なことがあることは確かなのです。では、それはわれわれの時代にどういうふうに行き着くかということ、それが実はインターネット上の集合知の問題であると僕は思います。もっとも、これは政治的な意思決定とは隔離されているのだけれども、常に見ておかなければならない参照項として、私たちはインターネット上に常にあらわれてくる「一般意志」を見続けるべきである、というのが僕の結論となっています。

といったところで、結構時間も時間ですので、いったん切って質疑応答とかにしましょうか。

### 【注】

<sup>1</sup> 東浩紀（著・編）「チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド 思想地図β vol.4-1」ゲンロン（2013/7/4）

## Part2：質疑応答

**【太下】** 東さんのお話は、お聞きになって分かる通り、軽い口調で難しい話をしていますので、レベルの高い質問をするのはなかなか大変かなと思いますが、「巖流塾」の塾生も事前に勉強してきているので、さっそく質問を投げかけさせていただきたいと思います。では、小松さんからお願いします。

**【小松】** 大阪で経営コンサルティングをやっております小松と申します。きょうはありがとうございました。

一般意志の考え自身がネットでも何人かの方が書かれていたのですが、私も読んだときにアダム・スミスの「見えざる手」と一般意志というのが似ているのか、似ていないのかというところと、また先生が書かれている「一般意志2.0」で、先ほども欲望の具現化ということであれば、グローバル主義の市場等が経済という意味ではそれを体現しているのかなと思ひまして、その辺が相似性があると考えていいのか、もしくはまったくそれは関係ないものというのか、そのあたりは先生はどのように考えていらっしゃるのかなと思ひまして……。

**【東先生】** アダム・スミスの「見えざる手」と「一般意志」には、僕も相似性があると思っています。「一般意志2.0」が出版された後も、同じような指摘を何回か受けています。

経済というものは、よく投票行為になぞらえます。実際に、いろいろな商品を買うことができるのだけれど、「これを絶対に買わない」という憎しみみたいなものと憎悪みたいなものは市場では表現できないですね。それが表現できるというところが、言語のちょっと違った性質だと思います。つまり、私たちは何かを支援するというプラスの欲望を表現するものとして「市場」という仕組みを持っているわけです。けれども、マイナスの欲望を表現する仕組みとしては何も持っていません。そこで、インターネットがそういうものとして使われているのではないかと僕は思っている



小松創一郎氏

のです。ですので、ネット上でヘイトスピーチがあふれるのは当然なのですよ。

**【小松】** それと関連して私が思ったのは、先生の現実的な施策のひとつとして、国会なり何なりでネットで分析した一般意志と見られる声を流すという話があったのですが、市場と絡めて考えたら私は政治家そのものを株式に見立てて、きちんと毎年報告させて、毎月ではないですが、人気というか、どれぐらい評価されているかというのを明らかにするというような、そういうふうな表現の仕方でも民意を反映させるということもできるのではないのかと思ったのですが……。

**【東先生】** つまり、政治家という存在が民意を反映するものであっていかどうかということだと思っておりますよ。言い換えると、代議制民主主義の基本は、人々の民意というものがまず大前提として正しくて、代議士はまさにそれを代理するわけですよ。けれども、そういう意味では僕の考えでは、おそらくこれからの政治家の役割は結構大きく変わっていくはずですよ。つまり、政治家は人々の欲望をそのまま実現しているだけではほとんど意味がないのです。まさに今おっしゃったみたいに、それであれば常に、それこそリアルタイムに政治家の行動自体をわれわれが集合的に決定するというシステムをつくれれば良いはずですから。たとえば、政治家のスケジュールそのものも全部選挙民に対して公開して、誰と打ち合わせを入れるのかどうかと



東浩紀先生

いうこともみんな投票によって決めることだってできるわけですね。たとえば、僕は大田区に住んでいますが、大田区の法人格みたいなものを大田区民が常にリアルタイムでつくっていて、その法人格の代弁者として誰かひとり代理人を雇っている、みたいなことですね。だから代議制民主主義の理想はそこにいきつくわけです。

けれども、まず第1に、さっきもお話したみたいに、これからの世界においては、人々の民意は、むしろそういう成熟した議論の果てに出てくるのではなく、もっと直接的で感情的な欲望みたいなものとして出てくる可能性が高いのです。ですので、それを民意の反映だという形で代議士が振る舞ったりすることは、むしろ全体にとってはあまり良い事態にはならないのです。むしろ、政治家の役割は、人々のそういうポピュリズム的な、もしくは無意識的な欲望みたいなものをいかにコントロールするかということに重点が置かれることになるはずですね。というか、そうならなければいけないということが、まず第1のポイントです。

予測みたいなことを言ってもしょうがないのですが、すごく簡単にいうと、たぶんこれからの世界は、僕たちが今まで見ていたものよりもはるかに子供っぽい世界になると思うのですよ。つまり、おそらくインターネット後の世界においては、「あいつ、嫌いだ」とか、

「あいつ、好きだ」とか、「あいつ、気に食わない」とか、「気持ち悪いからやりたくない」みたいな言葉ばかりが世界に満ちていくようになると思います。

だから、たとえば現在でも書店に行くと、「こんな本がベストセラーなんだ」みたいな本がいっぱいあって、少しだけ頭を使っている本が出版されている、という感じですけど、この比率もまったく変わっていくと思います。つまり、みんなのリテラシーが高くなるということは、逆にいうと、頭が悪い人間でもテクノロジーを使うことができるということなのです。こうしたことが、今は急速に進んでいるわけですね。

近代産業以降の僕たちの世界は、たとえば本を執筆する能力とテレビで意見を表明する能力等が、いわば根拠なくバンドルされていた世界なわけですね。でも、そのバンドルが今急速に解けつつあるわけですね。たとえば、語彙がすごく少なくて、シャツもまともに着れないような人でも、ネット上ではクリエイターとして影響力を発揮できる世界になるわけですね。たぶんそれが引き起こすことは旧世界の破壊ですね。僕たちは今もその破壊に向かってばく進しているわけです。僕は文化がそうになっていくのはしょうがないと思うのですが、それにポリティックスが巻き込まれるとよくないと考えています。それはポピュリズムの問題ともまたちょっと位相が違うのです。ある意味、教養の低下とも関係するのですが、自分が知っていることだけはやたらと知っていて、でも、ほとんど常識は知らないみたいな人間ばかりがふえていく世界になるのです。でも、これもインターネットとテクノロジーがつくり出す必然なのですね。つまり簡単にいうと、昔は本を読むといっても本の量が少なかったわけですね。何かを学ぶといったら学校で学ぶしかなかったわけですね。けれども、これからの世界は、たとえば7歳とかある程度知的な好奇心ができてきたときに、最初に出会うメディアがインターネットであるという社会になるわけです。そして、キーワードさえ入力すれば、世界についての情報がいわば無限に手に入るといったと

きに、もうそれ以上の情報に対して知的好奇心が湧かないまま成熟していくという可能性が非常に大きいと思います。

たとえば、昔はアニメ番組はあまり放送されていなかったわけですので、ニュースとかほかの番組を見るを得なかったわけですよ。でも、今はアニメだけを延々と見続けていても一生終わってしまうぐらいの映像の量があり、しかもインターネットではほとんどが無料だったりするわけですね。そういう世界ができてしまったときに、今言ったみたいに、何かを表現するということと、知的レベルや教養レベルの高さとかが今までみたいにバンドル化されなくなるのです。

そこで、たとえば政治的な意見表明も非常にしやすくなるのですが、そうした単純にネット上に出てくる政治的な意見表明みたいなものを、そのまま代理するというようなことを政治家がやる時代はそろそろ終わるのではないかと僕は思っているのですがね。それはある意味で民主主義というものがどこかで破綻するという話でもあると思います。

**【中谷理事長】** 今のお話と一般意志が可視化できるのではないかという話とは、どういうふうにつながるのですか。もう一度説明してください。

**【東先生】** 先ほどもお話しした通り、僕は「一般意志」とは、一般的に欲望が可視化されるということだと思うのです。自分たちの社会がどんなことを欲望しているかということに関しては、私たちは常にすごく自覚的でなければいけないのです。けれども、それをもとに社会全体が意思決定するということは切り離すべきだと思うのですよ。

**【中谷理事長】** では、「一般意志」に民主主義的な意思決定が従うべきだということをおっしゃっているわけではないわけですね。むしろ、そういうことに対しては警戒心を持って対応すべきだということを考えているのですね。

**【東先生】** はい、「一般意志」に民主主義的な意思決定が従うべきだというわけではないのです。僕は、「一般意



中谷巖理事長

志」は自分たちの社会にとって制約条件である、という言い方をしています。つまり、それに従うのではなくて、制約条件として受けとめるべきだということなのです。たとえば、現在の日本は、合理的に考えれば日韓友好が望ましいのしょうけれども、日本人と韓国人が何かの行き違いでお互いすごく大嫌いなのだとしたら、現実に友好は困難ですよ。それを無視して、友好を強引に進めようと思えば思うほど、ヘイトスピーチみたいな現象が起きてくるわけです。そういうときに、人々の感情が生のまま見えてきているということ自体は非常に重要な政策判断材料になるので、「ヘイトスピーチはけしからんことです」とかと言っている場合ではなくて、僕はあれを政策の判断材料にするべきだという立場なのです。

**【中谷理事長】** では、裸の欲望として出てくる「一般意志」は決して共通善でも何でもなくて、共通善をつくるためのひとつの参考となる情報というふうに位置づけるべきですか。

**【東先生】** そうですね。つまりこんなふうに僕は思うのですよ。

たとえば、絶対に正しい政策でも金がなければできないことがありますよね。それと同じように、絶対に正しい政策でも人々の感情がついてこなかったらできないわけですね。その部分のチェックは今までよりもはるかに細やかにできるようになるだろうというこ

とです。だから、もしかしたら「政策のベータ版」みたいものを挙げて、まずはそれに対する人々の反応を見るみたいなシステムを入れてもいいのかもしれませんが。そのときにすごく激烈な反応がくるようであれば、それはやっぱりその政策はどこかでつまり可能性があるのでないか、と思っています。

**【小松】** ありがとうございます。

それとはまた別の切り口でどう政治にインターネットを利用するか、オープンソースの話、先生は自分の述べていることはオープンソースを政治に利用するか、そういうのとはまた全然違うんだよということを書いていただいたのですけれども、アイスランドか何かは憲法の改正をオープンソースを使ってやり出したと昔記事があったと思うんですけど、地方自治ぐらいのレベルであれば、オープンソースの考え方をうまく利用すれば法律の改正とか使えるところは結構あるのかなと思ってはいるのですけれども、そのあたりは……。

**【東先生】** 地方レベルの政治でオープンソース的な考え方がうまく導入できるということは、多分オープンソースを補完するネット外のコミュニケーションがすでにあるので、そこである種の感情的操作をやりやすいからだと思うのですね。たとえば、憲法改正という話が出ましたが、日本では憲法改正って、なぜかすごく難しい問題で、最近でも「96条の会」などもできたりしているわけです。けれども、僕は基本的に憲法にあまりこだわりがない人なので、「改正したいのだったらすればいいや」と思っているわけですが、一方で、憲法というものにすごくこだわりを持っている人たちがこの国にはいるわけですね。なぜか彼らにとっては憲法というものは、昔のレイブの記憶とかに近いような何かになっていて、9条をさわられるということは自分の尊厳が脅かされるということだ、ぐらい大事になってしまっているわけです。そういうときには、オープンソースでみんなの知恵を持ち込むということとはたぶん機能しないのだと思うのですよ。つまり、一部の

人間たちが何かに対して感情的にすごく固着してしまっているとき、そういう集団があるときは、みんなの知恵を持ち寄って最適解を探ろうというプロジェクトそのものが破綻すると思います。つまり、日本ぐらいの国の大きさになると、そこで憲法にこだわっている人を「君は何で憲法にそんなにこだわっているのだ」と一人ひとり個別撃破というわけにもいなくなるわけですね。僕が、地方自治体とか小さい集団であれば、オープンソース的な試みが可能になると思うのは、そういうことです。

人間のコミュニケーションって基本的にマルチモーダルなので、ネット上のコミュニケーションだけで合理的な解を出そうと思っても、違うものがどんどん進入してしまうわけですね。それをどう処理するのかということと同時に考えておかないと、インターネット上の意思決定というものは、空理空論で終わるのだと思うのですよ。

そういう点では、僕はネット上での合意形成みたいな発想に対してどんどん懐疑的になっています。ネット上での合意形成が可能なのは、シンプルモーダルな、ひとつのレイヤーでのみ議論ができるときだけだと思います。ただし、人間のコミュニケーションはどんどんある意味でメタ化していくし、本来の問題であったものがどんどんずれてきたりしますよね。それが僕たちの自然な言語コミュニケーションなので、そのずれみたいなものをサポートする別のコミュニケーションの回路を外側につくっておかないと、ネット上だけでコミュニケーションをとるということはリスクが高いと思います。

**【小松】** 最後、私の質問として1点だけあれなんですけれど、そういう話を聞いていますと、今後政治家のありようというのは非常に難しいということですね。欲望が丸出しになって、映っているのを見ながらですね。でも、その中で合理的な判断で何が全体としてベストかというのを政治家は選んで決めていかないとイケないというわけですね。よりそういうセンスがあることが

求められるということですね。

**【東先生】** 僕としてはそう思っています。

とにかく、民意をそのまま実現しても世界はよくなるという前提で政治システムを組み上げるべきだと思うのですね。僕の「一般意志2.0」という本は、そういうことを考える第一歩として書いたという感じなのですが、だからこれはある意味ですごく凡庸な話なわけですよ。人間というものは合理的な理性を持ちながら、理性とはまったく無関係な情動や欲望があって、このバランスの中で人間というのは成熟したり、いろいろとやっているわけですね。それと同じようなことが集団の意思決定でも必要になってくるということですね。そのときに、一方においては社会全体のいわば理性の体現者としての政治家がいて、もう一方に社会全体の欲望の体現者としてのネットがあり、両者のある種の葛藤みたいなものの中で社会が運営されていくというシステムになるのではないかと思っています。

**【宮本】** マーケット調査室の宮本と申します。

それにかぶせての質問ですけど、それを是とした場合なのですけど、今の民主主義制度では理性の体現者って、言葉通りいうと、良薬口に苦しなかなと思えますが、票がそもそも入らないというところがあると思うんですけど、となった場合、一般意志の欲望の体現者に追随するような人が結局票を集めて、両方、欲望、欲望となってしまうのかなと思うんですけど、このあたりの防ぎ方というのは何かお考えがありますか。

**【東先生】** 今の質問はすごく重要で、僕もうまく答えられるかどうか分からないのですが、おそらくひとつのヒントは、リズムというか時間だと思っているのですね。つまり、欲望というものは、この瞬間に欲望するものなのです。別の言い方をすると、欲望というものは無時間なのです。それは人間個人でもそうだと思います。ある欲望が高まり、その欲望を果たしてしまっただけで、しばらくたつと、「俺、何であんなことに金を使ったのだろう」と思うことはよくあるわけですね。



つまり欲望の盛り上がりや充足みたいなことは、時間の差でもあるわけですよ。僕たちが合理的な決断だと思っているものは、結局はある種の時間的連続性の中でいろいろ考えたときに出てくる決断なのです。そのときに代議制民主主義は、たとえば4年であったり、6年であったり、というかなり長いスパンでしか民意を反映しないので、あの制度が欲望の抑止力になるのだと僕は思っているのです。つまり、政治家を変えるのに時間がかかるし、選ぶのに時間もかかるし、とにかくゆったりしているわけですよ。

他方、それに対して、ネット上の民意というものは瞬間、瞬間で移動するわけですね。たとえばこの間まではある政治家について「〇〇すごい」と言っていたのが、今はもう「〇〇最悪」みたいな変化となるわけです。ネットはそんなすごい振幅で動いているわけですね。

こうしたリズムの差異みたいなものがあるわけですね。一方で、欲望がぶわっとリアルタイムで出てくるネット。そしてもう一方で、それがあつた種ならされて、冷静な判断として選ばれる政治家という状況をつくるはずだと思うのです。ただし、今は両者がすごくごちゃごちゃになっていて、僕は過渡期だと思っているのです。

僕は、ネットの話をしてしまいましたが、もしかしらこれはマスコミの問題と結構連続する問題なのかもしれないですね。つまり、もともと19世紀の初頭に代議制民主主義、議会制民主主義が確立されたときには、

新聞ぐらいいしかマスメディアはなく、しかも新聞も今日のように大部数が発行されていたわけでもなく、毎日毎日発行されていたわけでもなかったし、世論調査もなかったわけですね。世論調査という概念ができてきたのは20世紀だと思います。20世紀は大衆社会です。つまり19世紀の後半頃までは、国家はそもそも自分たちの国に何人ぐらい人がいるのかも正確には分かっていなかったわけですね。そして、代議制民主主義とは、そういうところにつくられたシステムで、つまり代議士にとっては4年に1回か6年に1回の意思表示こそが民意であり、ほかにチェック機能はまったくなかったわけですよ。それを補完するものとしてもっともっと早いリズムのものがいっぱいつくられようになったわけですね。たとえば新聞なんて毎日更新されるわけですよ。インターネットに至っては毎時間とか毎分更新なわけですよ。そういう、議会制民主主義が前提としていた時間感覚とは全然別の時間感覚のメディアが出てきたのです。そして、それらは欲望の体現化ということに対してとても向いているメディアでもあったわけですね。

議会制民主主義ができてきた時期は、長い時間の意志集約しかわれわれは考えていなかったのですが、20世紀、21世紀と時がたつにつれて、どんどん短い単位の意志集約が可能になっていったのです。そして、短い単位の意志集約が可能になればなるほど、さっき無意識とか情念と呼んだ突発的な盛り上がり、意志集約の中で大きな比重を占めるようになってきた、という話だと思います。

**【宮本】** ありがとうございます。

もし仮にそれを是とした場合であっても、選挙があるときのその瞬間というのは欲望ってあるわけですね。つまり1回選ばれると、ずっと長いというのは分かるのですが、選ばれる一瞬というのはやっぱり欲望の方を見ないといけなくて、結局その瞬間においてはその問題は解決しないのかなと思うんですけど…。



宮本祐輔氏

**【東先生】** 僕は、解決策というものは、ネット選挙の考え方とはまったく対極ですけど、本当は有権者、マスコミ、ネットといったシステムとは切り離れたシステムにするのが一番良いのではないかと思いますけれど。つまり、2つのメディアの時間を切り離すということなのです。たとえば、政治家はテレビや新聞に出るのを禁止するとか、ですね。ただし、簡単にはいかないと思いますけれど。

たとえば、今は2ちゃんねるでバツと盛り上がったことを、翌日のテレビ、新聞とか週刊誌が追っかけるというようなかたちで、メディア上でぐるぐる情報が回ることによって、一時のネット的な熱狂に政治家が振り回されるということが起きるわけですよ。それを解決するひとつの方法は、政治家が活躍する世界とマスメディア的な欲望の世界を切り離すということなのです。そういう解釈はあり得ると思います。ただ、現実にはなかなかそうはならないと思いますけれど。

**【宮本】** そうですね。仮にそれを是とした場合なんですけれど……。ならないところで、この塾でも何年か話をしているのですが、では、どうやって政治家を選ぶのかということも難しいなということですね。切り離すということは情報が無い中で政治家を選ばないといけなくて、では、誰がすぐれた人かを判断する材料というのがないんです。

**【東先生】** これは答えにくい質問ですね。何で答えにく

いかというと、僕は基本的に選良を大衆が選ぶということ自体、あり得ないことだと思うからなのですね。だって、大衆は大衆だからです。

今の民主主義政治システムの中においても、僕は特に選良が選ばれているとは思っていません。だから、「国民がすぐれた人間を選ばないということは困ったことですよね」と言われたら、「いや、それは民主主義のシステム自体がそういうものでしょう」と応えることになるわけです。民主主義のシステムは、そのスタートポイントとしてそもそも普通選挙とかを前提していないわけですよ。いってみれば、あるクラブのメンバーが「俺たちが選ばれる仕組みをつくらうぜ」という話じゃないですか。「俺たち、結構金持ちだし、家系もいいじゃん」「だから俺たちが国を仕切っているのだよ」みたいな感じですよ。でも、「王政だけはまずいから、そろそろ互選にしておこうか」みたいなことですよ、代議士制度とは。もちろん、「社会契約論」とか読んでしまったものだから、理念としてはとにかく国民全員みたいなことを言うわけですね。そして、「やっぱり国民全員に告知をするべきではないのか」とか言い出したわけです。ですので、国民全員が選挙権を持つということを前提にして、その中で“選良”を選ぶためのシステムとしてみんなで選挙をやるのが正しいかどうかということとはとても怪しいと思いますよ。

だから、ある意味で、僕たちが持っている民主主義とか議会制民主主義のシステムというものはレガシーシステムであって、別に最初から最適解を目指してこのシステムがつくられたわけではなくて、たまたまつくられたものに継ぎはぎ、継ぎはぎで今日までやってきているわけじゃないですか。だから、こんな大衆社会で、しかもネットとかがある状態で、そんな選挙で選良が選ばれるわけがない、というのが私の答えなのですが。

**【宮本】** ルソーの言葉を借りると、投票行動というのは、先ほどのお話でいうと、匿名行動じゃないですか。なので、フェイスブックに書くとかというより、どちら

かというところとニコ動に書き込むというほうに近いのかなと。

**【東先生】** そういうことです。

**【宮本】** ということは、そこには個人の欲望というのがダイレクトにあらわれる。立候補者は限られていますけれど。となった場合に、ルソーの第3章のところで、人民が事情を知ったうえで討議をする場合に、仮に市民たちがうんたらかんたらというところがあると思うんですけど、これをまさに地で行っていると思うんです。先ほどの説明のところと……。

**【東先生】** だから、ルソーの「一般意志」というものは、インターネットの社会になって実現したわけですよ。けれども、それは「一般意志」ではなくて、言葉を直せば「一般欲望」となるわけです。引きこもりでまったく世の中のことを考えていないようなやつが、ネットみたいな道具を与えられたときに、どうやって「一般意志」が生成するかということに関しては、ルソーはこの上ないくらい正確に書いていたわけですね。しかも、「一般意志」が誤らないというわけです。ちなみに、この「誤らない」という言葉ですけれども、「誤らない」というのは、別に「善悪の基準にのっとって誤らない」という意味ではなくて、それは必ず正確に大衆の意志を反映しているという意味で「誤らない」という言葉を使っているのですから、それはまったくその通りなのです。つまり、「一般意志」は大衆の意志を正確に反映しているのです。たとえば、ある共同体があったとして、その共同体の「一般意志」が「死ね」と言ったら、必ず死ななければいけない、というようなことをルソーは言っているのです。この部分、大変悪評が高いところなのですけれど。僕はこれの説明に関しては、アマゾンのリコメンドの例をよく出します。アマゾンのデータベースは「一般意志」みたいなものです。つまりみんなばらばらに買っているわけですよ。たとえば、ある本を買ったあなたは次にこの本を買うだろうというリコメンドがきますよね。これは誤ることがないわけですよ。なぜかといえば、それに対して、

たとえば、「いや、俺はアマゾンのリコメンドには従わない」といって抵抗するのは自由なのだけれど、抵抗したことが結果として「一般意志」として回収されていくわけですね。単にあるリコメンドに従わなかったやつがいた、というデータになるだけのことで、アマゾンという神にとっては、それがおそらく、ルソーの言いたかったことなのです。

つまり、ルソーのいう「一般意志」とは、政治的な「一般意志」というよりもアマゾンのデータベースに近いのです。ルソーが、「一般意志が死ぬと言ったら死ななければいけない」というのは、つまりアマゾンが、「次にこれを買え」と言ったら買わなければいけないという話なのですが、この「買わなければいけない」ということも、義務だと考えるよりも、「高い確率で買うことになるだろう」といいたいの話なのです。そして多くの場合、実際に買うことになるわけです。

だから、同じ意味で、一般意志が「死ぬ」と言ったら、高い確率で死ぬことになるわけですよ。だって、人民がそれを求めているのですから。人民全体から、「おまえ、死ぬべきでしょう」といわれたら、だんだん周囲の雰囲気も悪くなってきて、「はい、そうですね、死にますね」といいたいの感じになるわけです。だから、こう解釈すると、ルソーのいっていることは、とてもクリアだというのが僕の考えなのです。

つまり、正確に言えばルソーの「一般意志」というものは、「集合知」というよりも、集合的な無意識なのです。これは、一般的な欲望の理論としてはとてもよくできていると思います。問題なのは、これを民主制の基本だとわれわれが大いなる勘違いしてきたことです。そこに問題があるのであって、ルソーと熟議の話はまったく何の関係もないと思います。

フランス革命についても、一般的には高邁な思想で革命がなされたということになっているのだけれど、ご存じの通り、だいたいあれは巨大な挫折プロジェクトだったわけですね。革命を成し遂げたら、あっという間にロベスピエールが来て、王政復古です

よ。あの革命とは何だったのか、みたいな話なわけです。結局のところ、民主主義とはそれによって正しいことが起きたためしがない理念ですよ。

では、どんな政治システムがいいと思いますかと言われると、どうなのでしょうね。中谷先生も講演で言われたみたいですが、意外と中国共産党みたいな仕組みもあり得るのではないかと思います。つまり、中国では共産党という熟議エリートシステムがあって、その外側に荒々しい資本主義が「一般意志」としてあるわけです。エリートたちは、単純に「一般意志」に従うわけではないのだけれど、「一般意志」の動向を見ながら政策決定をしていますので。

**【太下】** その意味では、とてもすばらしい仕組みではないですか。先ほどの講義が、よりクリアになる説明だったと思います。では、次の質問は谷口さんお願いします。

**【谷口】** 革新支援部の谷口と申します。よろしく申し上げます。

まずひとつ目ですが、ネットで検索するときに、自分が好きなものばかりが見えてしまい、だんだん思考が固定化されていくという問題がよく言われていますが、検索の際に自分の好みとまったく真逆の内容だったり、あるいはさまざまなニュースサイトが表示されれば、問題は解消できるかと思いますが、そのよう



谷口智史氏

なものについてはどういうふうにお考えでしょうか。たとえば、自分の好みと真逆なものがネットで出てくる、そんな検索エンジンができればどうなのかなど。誰も嫌だろうとは思いますが……。

**【東先生】** ちょっとぴんとこないですね。昔、ハーバード大学教授のキャス・サンスティーンが、たとえば民主党のサイトには共和党のリンクを強制的に埋め込む、というようなアイデアを言っていましたよね。でも、それは民主党と共和党のような感じで政治的対立軸がすごくはっきりしているときにしか機能しない話です。そもそも政治が嫌いな人は民主党のサイトを検索しないじゃないですか。民主党に対立するのは共和党なのか、というと、実はそうじゃなくて、「政治に関心がない」というのが本当の対立軸じゃないかと思います。いや、そもそも「ネットにすら関心がない」というのが本当の対立軸ではないのかとなるわけですね。だから、対立というのはなかなか難しく、関心がないものをリコメンドするというのは論理的にかなり難しいと思うのですよね。

そういう意味でいうと、今おっしゃるみたいに、「あなたが関心を持たないかもしれないもの」を対極の事項をインターネットでリコメンドしたとしても、そのときの対立軸そのものは共有されているわけだから、結局のところ、ある意味では関心があることをリコメンドすることしかネットではできないのだと思います。それはわれわれが持っている言語の限界みたいなものだと思うので、グーグルも誰も超えられないんじゃないかなと思います。

結局のところ、新しい検索ワードを思いつくということが、今一番創造的なことなのです。これは間違いなくそうで、検索すること自体は誰でもできるわけで、どの言葉で検索するか、ということをおもいつくということが実は何かの調査の価値の95%ぐらいまでを決定しているみたいなところがありますよね。その「言葉を思いつく」ということがどこから出てくるのか、みたいなことを考えたときに、それはおそらく僕の考

えでは本当に結構深い話で、人間が言葉を使うということの原初の問題に近いと思います。つまり、何かを見たときに、それをどういう言葉が表現するかとか、そういう話に近いのです。そして、「この言葉を使う人間はこの言葉を使うだろう」「あの言葉を使う人間はこの言葉を使うだろう」というかたちで、言語の中で完結してリコメンドしている限り、おそらく新しい言葉は出てこないのですよね。それは「詩をつくるということとは何か」とか、「本当の愛の言葉とは何か」とか、そういう問題に限りなく近い話になってくるのです。たとえば、体を動かすと新しい検索語が思いつくみたいな、僕たちが持っている言語のシステムと違うものを介入させないと、ふだん使っている言葉の外には人間はたぶん出ていけないのですよね。それをネットでリコメンドできるかといったら、それは定義上できないということになると思います。

**【谷口】** たとえば昔ロシア学生がつくったサービスで、毎回違う人とチャットできるサービスがあったと思いますが、たとえばああいった方向性が何かあり得ないですか。

**【東先生】** それって、かつての日本で流行ったダイヤルQ2とか伝言ダイヤルみたいなものですよ。だいたいそういうのは一気にエロ目的になっていくわけです。つまり、不特定多数の人間とつながりたいという欲望そのものがそもそも全然自由な欲望ではなくて、何かの目的に依存しているじゃないですか。結局それが人間の限界なんですよ。

たとえば、ランダムに答えを返す検索エンジンができたとして、では、それをわれわれは使うかという話が次にありますよね。われわれは別にランダムな情報を欲しくはないわけですよ。だから「ランダムな人間と出会えますよ」というサイトは、いろいろな人間と知り合いたいという人間が使うのではなくて、特定の目的、だいたいエロ目的に利用されるという事実が実はわれわれ人間の限界をすごくよく象徴してしまっているのですよね。だから、人間の想像力の範囲を

拡張することには、実はネットの検索はまったく向いていないというのが僕の結論です。

**【谷口】** 次ですが、書籍「一般意志2.0」の中で、未来の世界では国家の役割は縮小して、市場の役割や、あるいは個人の役割が拡大するようなことをお書きいただいていたと思うのですが、たとえばグーグルやフェイスブック等の世界的なインフラ企業には、かなり力が強くなってきているところがあるので、そういったものが新たな権力として台頭してくる可能性についてはどのようにお考えでしょうか。

たとえば結果的には、別な公共として持ち上がってくるのではないかと……。

**【東先生】** まったくおっしゃる通りで、そうだと思います。

僕はしばしば思うのですが、たとえば今、グーグルが急にGメールを廃止したら、この世界はいったいどうなるのだろうか。「サーバ維持費もばかにならないので、Gメールを1ヵ月後に中止します」と言うことは、しょせんは無料サービスなのだし、できますよね。そのときに、たとえば、世界の株価とかどうなるのでしょうか。おそらく大恐慌だと思うのですよね。

でも、そういう意味でいうと僕たちの文明はかなり危ういところにすでに足を踏み込んでいるわけです。だから、グーグルが権力になることを恐れているとかという場合ではなく、インターネットの普及からわずか15年足らずで、もはやかなりやばいことになっていますよね。今後はそれについて何か対応策を考える必要があるのではないのでしょうか。つまり、ひとつの検索エンジンが急にサービスをやめたからといって、文明が崩壊してしまわないようにする必要があると思いますよ。だから、それは権力がどうかというレベルを超えた問題になってきているという感じはしますね。

**【谷口】** 最後にひとつだけ、お願いいたします。たとえばIT化やグローバル化が進展する中で、世界的に急激に雇用が失われるという問題が出てきています。たとえば現在3Dプリンターでしたり、グーグルの自動運転

カーみたいなものまで今後出てきて、コンピュータに代替できないような能力を育てようという話も出ていますが、インターネットの分野ではどういうことを考えていかないといけないのか。

**【太下】** 今の質問を補足しますと、「これからはコンピュータに代替できない能力が必要だ」と言われている中で、具体的にはどのような教育が必要なのかというイメージをお持ちであれば教えていただきたい、という意味です。たとえば、先ほどおっしゃった「新しい検索語を考える」ということも、この時代においてはひとつのクリエイティビティですよ。

**【東先生】** これまた身もふたもない話をするようで恐縮ですが、結局のところリテラシーとか教育というものは何なのかというと、「全体の底上げ」ですよ。僕は「全体の底上げ」自体は大事だと思うのですが、一方で、たとえば100万人とか1,000万人単位の人間を一気に底上げできるような程度の能力は、インターネットで代わりたい代替可能であるというのがわれわれが直面している世界だと思うのです。結局のところ、100万人とか1,000万人単位での教育とは、標準的な労働者をつくるためにあるということです。でも、標準的な労働者であれば、別にインド人だろうがベトナム人だろうがどこの国の人でもいいよね、という話ですよ。いや、それどころかネットでクラウドソーシングをすれば、世界中で匿名の人々がわらわらと作業をして、それだけでやっていけるのかもしれないですよ。では、自国の労働者を保護するために、そういうグローバルなアウトソースは禁止することができるのかというと、それはできないだろうということです。この点は、有識者等がまだはっきりとは言わないことですが、結構破壊的な話だと思うのですね。

だから、これは将来がどうなるのか僕は分かりませんが、ベーシックインカムのような制度を導入して、あまり働かなくてもなんとか生きていけるというような状態を政府はどこかでつくらざるを得ないのではないのでしょうか。近代で必要とされていた労働力の多く

が機械もしくは情報で代替可能となっています。そもそも、労働力そのものがあまりなくなるという社会・経済を実現するためにテクノロジーはばく進しているわけですから、人類70億がみんな生き生きと働く世界はもうあり得ないと思うのですよね。そして、別にそれはそれでいいといえればいいわけで、あとは富の再分配をどうするかという話です。もっとも、実際には先進国と後進国の経済格差とか、いろいろな問題があるので、地球全体がそうなるのにはすごく長い時間がかかると思いますけれど。とはいえ、長期的には「働かなくても生きていける社会」をつくるということしか、今後の政府の目標はないと僕は思いますけれどね。

実際には「働く」ということは、人間を社会的にしたり、その人に尊厳を与えたりするということで、非常に重要な役割を果たしているのだから、働かなくなった人々を管理することは、すごく難しいと僕は思います。冗談ではなく、みんなにある意味でオタクになっていただき、それぞれ趣味を見つけてばく進していただきたい方向しか、おそらく選択肢はないのではないかという気がします。一方で、あまり言いたくないのですが、代替不可能な能力を持っている少数の人々には高額な富が集中するという方向になると思います。

**【谷口】** ありがとうございます。

**【張】** 大阪経営コンサルティングの張と申します。

今日はいろいろおもしろい話を聞かせていただいてありがとうございます。

私、一番関心がある質問からさせていただきます。

先生のご著書を拝読しますとインターネット等の情報技術が進化することによって、国民の一般意志を社会に実装する可能性があるということを感じました。ただし、一般意志というものが民主主義の社会の中で実装することができそうな国もたとえば日本のようにあれば、そうではない国もあると思います。たとえば、独裁国家とか、現実的には世の中には存在して



張寅鋒氏

います。そこで質問ですが、一般意志が社会に実装される時に社会はどう変化するでしょうか。アラブの春のような暴力的な事態が起こったことが一般意志と社会のぶつかり合いだと思います。しかし暴力以外のうまく調整できる方法はないかと考えたときに、東先生はどういうお考えでしょうか。

**【東先生】** まったくおっしゃる通りで、独裁政府を倒すのに「一般意志」は非常に有効で、そもそもフランス革命がそうだったわけです。その意味では、アラブの春とフランス革命はまったく同じ構造なのです。こうした革命のときに、「一般意志」というものは、「この体制は嫌だ」というように破壊には使えるわけですよ。

ただし、「一般意志」を創造的な活動に使うのは非常に難しいわけですね。先ほどオープンソースの話が出ましたが、オープンソースは何でうまくいったかというところ、あるプログラムがあり、それに誰かが何か新しいものを加えたときに、それがいいことか悪いことかをチェックするための基準が外側にあるからなのです。つまり、そのプログラムが動くか動かないか、または速くなったか速くならないか、便利になったか便利にならないか、等の基準ですね。こうした基準を決めるのは「みんな」ではなくて、機械ですよ。だから、基準が外側にあることがオープンソースを可能にしているのですよ。これはすごく大事なことで、たとえば自然科学の分野がオープンソース的に運営できる

のもこうした理由ですよね。つまり、何かを計測したときに、その数値が正しいか正しくないかを判断するのはみんなの意志ではなくて、外側の基準だからです。チェックは外側の基準が行うので、集団でできるのですよ。

でも、憲法についてはそうはいきませんよね。つまり、自分たちがつくったものを自分たちで正しいかどうか判断しなければいけないのですよ。こうすると、これは価値基準が循環するので、絶対に結論が出ないのです。

そもそもハイパーリンクとか、いわゆるウェブカルチャーそのものは、ご存じの通り、学術情報検索システムの発想からきているわけです。つまり、ある種の理系的な自然科学的な集団政策の発想が、オープンソースとかクリエイティブ・コモンズの中には入り込んでいるのです。そして、みんなそれで社会も運営できるのではないかと考えてしまっているのですけれど、価値基準を自分たちでつくらなければならない人文的社会的なプロジェクトに関しては、オープンプロジェクトはそもそも原理的に成り立たないのですよ。これはすごく重要なことです。それは技術の問題ではなく、自分たちで価値設定をしなければいけないのだから、論理的に無理なのです。

というわけで、「一般意志」は革命を起こすことはできません。「こんなことはやりたくない」「こんな制度は壊したい」ということはできるけれど、では、それで新しい政治体制を「一般意志」的にオープンソースでつくることができるのかというと、それはつくれないわけです。「一般意志」は、価値設定はできないので、これが弱点なのです。したがって、さっきから繰り返している通り、政策を決めたり、国家の方向性を決めたりするのはある種のエリートでやらなければいけないのです。そして、「一般意志」は、「こんなことをやったら、国民が文句言う」ということが常に分かるというふうな抑制力として使うしかないので。

日本には「空気」という言葉があって、「空気を読む」



という言い方もありますが、この「空気を読む」と「一般意志」を読むということはほとんど同じなのですよね。日本では「空気を読む」ということは、ムラ社会的でだめだと言われているわけですが、「空気」というのはある意味で「一般欲望」であるわけですよ。誰もそれについて直接表明はしないが、みんな黙って考えているわけです。それが分かるというのが「空気を読む」ということですよ。一言でいうと、ルソーがいていた「一般意志」というのは、日本語の「空気」という感覚にすごく近いのだと思います。

この「一般意志」は、「熟議」とか「合意形成」ということとは全然違いますよね。「合意形成」とは、誰かが言い出さなければいけないし、言い出した人は責任をとらなければいけないし、みんなで決めたことだというので責任も明確なわけです。これに対して、「一般意志」というものは、責任も明確じゃないわけですよ。だから、日本的な意志調整みたいなものは、ある意味で「一般意志」システムみたいなものと近いのではないかと考えています。

**【張】** そういう話を考えたときに、中国のことですけれども、中国は「民主主義」といいながら実は共産党の一党政治支配となっています。そういうような支配が実際されている中で国の指導部もそういう一般意志はどんどん出てきて、それが国に対してなんらかの脅威があると思っています。そういう危機感を持ちながらいろんな経済対策や生活環境改善をしようとしている

中で、やっぱり一党の独裁なので、独裁の限界があるということを感じています。私が思っているのは、今の中国はたくさんもっと小さいコミュニティができれば、いわゆる自治体と近いようなパワーを持っているようなコミュニティができれば、先生が今おっしゃっている一般意志にもっと近いようなことができそうじゃないかと思ってまして、先生はどういうふうにお考えでしょうか。

**【東先生】** 小さい自治体であれば、みんなで決める政治ができるだろうという意味では、その通りだと思います。たとえば、10万人ぐらいの規模の自治体であったならば、市民みんながお互いの欲望をそのまま直接言葉にして、お互いの性格等も分かったうえでコミュニケーションをとり、政治を実現するというのもできるのかもしれないですね。それは日本の地方自治体でもできると思います。

ただし、国家という規模だと、みんなで決めるということが不可能になりますよね。だからこれは規模の問題でもあるわけです。すごく大きな規模になってしまい、集団の無意識がぶわっと出てきたときに、それだけで政治を判断するのは非常に危険になってくると思います。

だから、小さい規模の自治体であれば、たとえばソーシャルメディアを使って市議会を運営する等、ネットで政治が問題なくできると思います。それはおそらく日本でもこれからやっていくと思うし、僕はそれはそれでとてもいいことだと思います。

けれども、それと国全体の話というのはたぶん違うと思うのですよね。日本という国の規模でも中国という国の規模でも、たとえば1億人となってしまうと、みんなで決めるということが無理になってくると思います。

**【張】** そうしたときに、旧ソ連というひとつ大きな国がありました。一般意志が反映されていって、小さなコミュニティができて、国自体が分裂しました。たとえばいろんなコミュニティができたときに、やっ

ぱり中国も分裂する可能性があるのでしょうか。東先生から見ると、分裂ということは避けられないのでしょうか。

**【東先生】** でも、中国が今一体になっているのは別に共産党のせいではないでしょう。現在の国家としての一体性は別に共産党がつくり出したわけではなく、中国には昔からあるものなので、仮に政治制度が変わったとしても、国家分裂はしないのではないですか。

**【中谷理事長】** インターネットとの関連でいうと、インターネットは中国ではある程度抑制されているのだけれども、インターネット・コミュニティがどんどんパワーをつけていったときに、現在の共産党による支配体制で将来的にもうまく対応できるかどうかの問題ですね。だから、中国政府は必死になってインターネットを検閲して、誰がアクティビストであるか、「一般意志」を左右するだけの影響力を持っている人間は誰か、といったことをピンポイントで見つけ出して、抑え込んでいるわけですね。

実はそれはアメリカでもやっていることなんじゃないでしょうか。きょうのニュースで、米国中央情報局(CIA)および国家安全保障局(NSA)の元局員が「国家がインターネットの検索とか、ツイッターの検索とか、誰がどういうことをやっているか、全部盗聴して、すべて把握して、それで本当に危ないやつにはそれなりの手当てをしている」という告発をしたのですよ。それだと中国と一緒にじゃないか、ということなのですよ。

だから、巨大な国家が、インターネット社会を適切にコントロールしながら社会の安定を図るということは、100年後の日本あるいは世界を考えるうえで、非常に大きなテーマになっているのかもしれないですね。すでにその萌芽として、「無意識の民意というものをどうやってうまく封じ込めながらコントロールするか」ということを、今の共産党トップはたぶんかなり気にしていると思うのですね。アメリカも、本能的にそういうことを感じているからこそ、CIA等の諜報機関が

一生懸命になって、文句言いそうなやつをつかまえて、個別に撃破しようとしているわけです。

というようなことを考えると、民主主義の将来やこれからの政治体制は、いったいどうなっていくのだろうなということが素朴な疑問ですね。

**【東先生】** 今、中谷先生がおっしゃったみたいに、インターネット上に可視化されている無意識というものを国家が常に検閲しながら、それが暴走しないように、ある局面においては誘導したり、抑圧したりしながら、国家の安定を図るというモデルしか、僕はおそらくないと思います。つまり、みんなの自制的な秩序に任せれば社会がうまくいくということはありませんので、おそらくそれしかないわけです。

ただし、そのときに、人権とか言論の弾圧とかにつながる可能性があり、これは結構微妙な問題なのです。日本も近い将来にこの問題にぶつかると思います。たとえば、ヘイトスピーチの問題等がすごく分かりやすい事例です。ヘイトスピーチも言論の自由の範囲内です。ただし、ヘイトスピーチを放置しておくと、それに賛同する人が多くなって行って、別のもっと大きな動きになり、現実には暴力事件につながっていくかもしれないわけです。そうすると問題があるので、初期のころに芽を摘むという発想がありますよね。それは何でなのかというと、われわれの経験則的に、もともとはそんなこと誰も欲望していなかったのに、ネット上でのつながりにおいてぶわっと増幅され、いつの間にか巻き込まれるという「欲望の連鎖」みたいなことがありますからね。そうしたときに、初期のころに芽を摘んだりするということは、これからの統治において非常に重要な要素になってくるはずですよ。日本では今はそういうことはしていないし、今までの民主主義国家の原則とか人権とかの原則からすると、そういう介入はしてはいけないのです。けれども、今後は介入をした方がいいのかもしれないですよ。はっきり言って、それは僕にもよく分かりません。問題は、こうした統治と人権問題とかのバランスだという気が



太下義之氏

しますけれども。

**【太下】** 直近では、児童ポルノの規制が結構問題になっています。あの法案が通ると、たとえば、「ドラえもん」のしずかちゃんの入浴シーンが発禁になるのではないかと噂されています。もしもあの法案が可決されてしまうと、発禁図書を所持しているだけで刑罰の対象になりますから、「ドラえもん」所持で逮捕、などというばかげた事態もあり得るわけですよ。

**【東先生】** 発禁にはならないかもしれないけれど、たぶんDVDとかでモザイクがかかるんだと思いますよ。いや、それは間違いなくそうですよ。今だって、たとえば篠山紀信とか、アラキーとかの昔の写真集は、児童ポルノと認定される写真が結構あるので、買えなくなっていますからね。当然そうなると思いますけれど、それもいいのか悪いのか僕はよく分からないですよ。非常に難しい問題です。しかもそれは単に個人の表現というだけではなくて、それが社会的につながりを持つことによって、一気にぶわっと結晶化するというようなリスクが今はすごく高くなってきているので、統治の側がそれを初期のころに芽を摘もうと考えるのは合理的と言えれば合理的ですよ。

**【上野】** 産業政策を専門にしております、政府からの受託調査をメインにしています上野裕子と申します。

2つ質問があって、ひとつ目の質問なのですが、現代社会はあまりに複雑で、すべてを見渡せる人はもは



上野裕子氏

や存在しない、古典的な選良が存在しないとおっしゃっているのですけれども、これは昔はいたというふうにおっしゃっているのかというのがひとつ目の質問です。つまり、昔の人の方が有能だったのか、社会が単純だったのかよく分からないのですけれども、昔はいた、けれども今の社会はというふうに、昔と今との比較でおっしゃっているのかどうかというのがひとつ目の質問です。

**【東先生】** それは違うと思います。たとえば今から20年ぐらい前までの時代は、いわゆる論壇らしきものがあった、「朝日新聞」と「文藝春秋」とかを読んでいれば「日本では今こういうことが話題だ」ということがだいたいリサーチできたはずなのです。今はそういうことは無理ですね。今はチェックすべきことが膨大にあります。“膨大に”というのは雑誌の数がということではなくて、そもそも何をチェックすればいいのかというレベルがすごく輻輳化していて、分からなくなっていますよね。これが象徴的な話だと思います。

たとえば、国会議員の先生がたが悩んでいるのは、日本の論壇がどこにあるのかが分からなくなっている点だと思います。そして、それは正しいわけですよ。たとえば、どう見ても「文藝春秋」と「朝まで生テレビ」とかを見ていればいいという時代ではないのですよね。それぞれが自分のメディアが日本の言論界だと思込んでいる人たちがいるみたいな状態になってし

まっているので、この事実ひとつをとっても事態は複雑ですよ。それで、政治体制等も若返ろうとはしているのだけれど、そもそも若返るという考え方がいいのかどうか、という点もよく分からないわけです。

では、2ちゃんねるとかツイッターとかで、情報がじゃんじゃか流れてくるわけですが、これが日本の言論界かといったらそうではないわけですね。なぜかというと、これらのメディアは、「文藝春秋」のような世界とはまったく無関係に動いているわけで、今度はそちらが見えなくなってしまうわけですね。だから、複数のレイヤーがいっぱいあって、とにかく全体の情報を把握するというのが無理になってしまったという話だと思います。ちなみに、大学が何でこんなふうに変な名前の学部ばかりになってしまったのかということも、全部同じことだと思います。

でも、たとえばテレビとかラジオとかが出てきた段階で、実はこうしたことは始まっていたわけです。つまり、「論壇」といったときに、なんとなく活字の世界のような気がするのだけれど、何で活字だけが言論なのだということですよ。たとえば、「朝まで生テレビ」を嚆矢とする、いわゆる言論番組というものが出てきたわけです。

僕は「論壇時評」を「朝日新聞」で1年間やっていたことがあります。そうすると、いわゆる論壇誌というものを読むことになるのですよ。毎月、ミカン箱みたいな箱が2つぐらい送られて来るのですが、それを読むということになっているのです。だけれど、本当だったら、テレビとかラジオとかも全部チェックしなければいけないですよ。けれども、そちらのメディアで誰が何をしゃべっているかということは全部スルーですよ。つまり、論壇とは活字の世界だけだと決めているわけです。

ところが、インターネットが画期的だったのは、それを構成するものが活字だったことなのですよ。インターネットも字だから読まなければいけなくなったわけですよ。

いわゆる言論というものが紙に刷られたテキストを中心に動いている時代は20世紀の前半までで、今から50年ぐらい前にテレビが一般化してから、本質的な変化がすでに始まっていたのだと思います。そして、ネットが登場して、ついにその現実と直面せざるを得なくなってきたということだと思います。

**【上野】** もうひとつは、今実際には、まだそこまではいっていませんが、一般意志を可視化していくという話です。NHKの「NEWS WEB」や「特報首都圏」、あるいは「週刊ニュース深読み」では、画面の下にツイートが表示されるようになってきています。あれは単なるツイッターなので、先生が言われているきちんとした一般意志の可視化にはなっていないと思うのですが、先生が言われている、グラフ化されたり、属性別に表示されたりという形は、あと何年ぐらいしたら実現すると思われていますでしょうか。これが2つ目の質問です。

**【東先生】** いつできるかという話ですけど、それは政治の側がやりたいと思えばすぐできることです。たとえば、市議会や県議会の議論をテレビで中継することは、すでにやっているのですよ。つまり、中継している画面に市民たちのソーシャルな反応をニコ動のようなコメントとして載せる、と決断すればいいだけなのですよね。いったんそういうような決断をどこの自治体か下して、もしもそれがビジネスになりそうであれば、きっとさまざまな人たちがわらわらと寄ってきて、どんどん新しいサービスをつくってくれるわけですよ。たとえばクリック1回で、選挙区内からのアクセスがどのくらいなのかが分かるとか、男性か女性なのかとか、です。また、たとえば実名ログインだと字がでっかくなって、匿名ログインだと字が小さいとかですね。もっとも、匿名ログインであっても基本的にはIPアドレスで一貫性は特定されているはずなので、男性か女性か、年齢は何歳ぐらいかは推定できるはずですが。これはサービスとしては技術的には簡単にできるのです。だから、それを導入すると決断さえ

下せばいいだけだと思います。

**【上野】** 書かれたツイートがそのまま出るのではなくて、少し分析されていたり、グラフになっていたりというのは難しいのかなと思ったのですが、技術的には現時点でも可能ということでしょうか。

**【東先生】** それは技術的にはできると思います。だから、こういうことが問題になるのはどちらかというと、それを受ける人間の側の問題です。だいたいこういうことに対してまず反論としてくるのは、どんどんと文句がくるような世界でまともな議論ができるのか、という話ですよ。でも、別に文句がこようがどうしようが、まともな議論をすればいいだけの話なのだから、結局は心の持ちようじゃないかと思っています。

次に、たとえばそういうふうにしてネットとつながって意見を寄せられても、自分たちの有権者の意見かどうか分からないという問題があります。IPアドレスから推測するとしても、プロバイダーがどこにあるかが分かるだけです。そんなあいまいな情報を政策の基礎にしているのか、みたいな話ですよ。

ただし、完璧な情報ではなくても、とりあえず参考になればいいのだから、これも結局は心の持ちようですよ。要するに、すべて心の持ちようなのです。だから僕は「一般意志2.0」で提案したものを阻んでいるのは単に心の問題なので、今すぐでも全然問題はないと思います。

**【太下】** そろそろいいお時間になってきましたので、これできょうの講義を終わりにしたいと思います。東先生、どうもありがとうございました。